

新體
詩集

悲戀悲歌

岩野泡鳴著

東京
日高有隣堂藏版

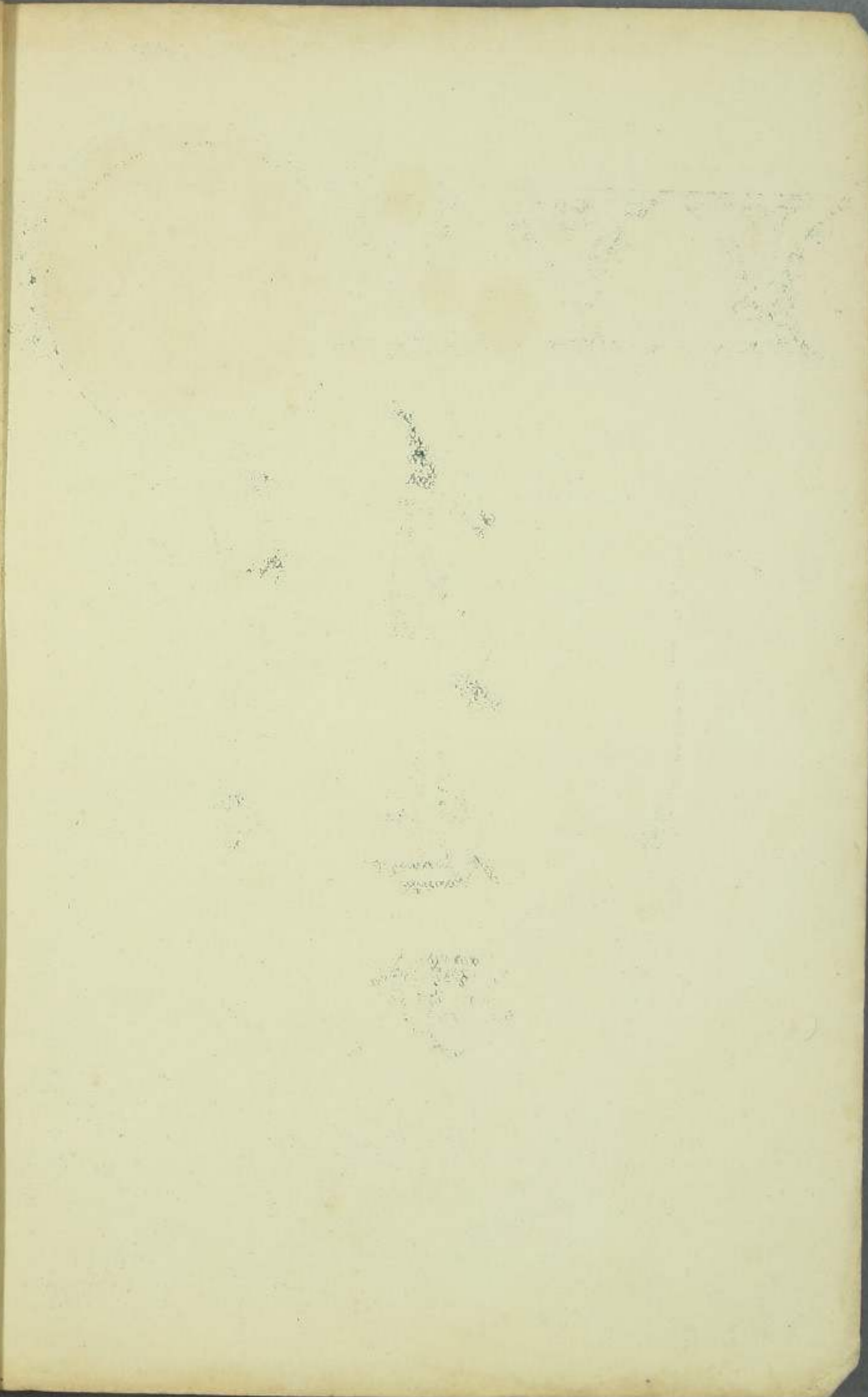
本間文庫
文庫 14
D 170

80
75
70
65

悲惠慈歌



蘭



增廣

本問

增廣



悲戀悲歌

岩野泡鳴作



文庫14
D170

田月之海ぬし

目次

「田月の海ぬし」の詩材を給へる婦人に、
この著の全部を献じ、
同僚の長友北村季晴君に、
附録「脱營兵」を献す、

目次

三界獨白

一 燭のゆらぎ	一
二 闇の横木	一四
三 ときはの泉	二六
血ぬれる鐘	三六
田戸の海ぬし	四九
高地の靈語	五九
旭日吟	六五

伊吹の螢……………	八六
螢を踏みつぶせる折に……………	九〇
雲翻々……………	九四
常世の光……………	九八
ねむりは醒めたり……………	一〇〇
ソネット……………	
一 海の響……………	一〇六
二 無言の石……………	一〇八
三 自然のあゆみ……………	一一〇

四 残る憂ひ……………	一一二
五 細き指輪……………	一一四
六 夢の子……………	一二六
七 薫ゆる火かげ……………	一二八
八 とはの寂しみ……………	一二〇
九 櫃の木……………	一二二
十 小暗き道……………	一二四
十一 まとふ怖れ……………	一二六
十二 うれひ一筋……………	一二八
十三 時劫の森かげ……………	一三〇

十四	いさゝ聲……………	一三二
十五	鍵を與へよ……………	一三四
十六	鏡を碎けよ……………	一三六
十七	蛇の河姥……………	一三八
十八	熱き真砂……………	一四〇
十九	酒興……………	一四二
二十	悲哀の俘……………	一四四
廿一	苦悶の鎖……………	一四六
	脱營兵(叙事小曲)……………	一四九

悲戀悲歌

岩野泡鳴 著

三界獨白

(一) 燭のゆらぎ

あゝ、君、わが愛、悲しき愛の
 御たねをさそひて春は過ぎぬ。

三月の樂み、その悲みは
若葉のかげろふ、野邊に過ぎぬ。
うらゝかなる日は再び見えず、
遠きにのこるは聖堂すがた、
そびゆるあらしぎ時鐘を鳴らし、
あしたの祈禱に呼ぶも恐怖。

二

罪なきものらはころもを飾り、
こわねも高らかに石段をのぼり、

ああ、うらやましき乙女のさまや——
聖母を唱へて席にすはり、
やましきことなく、隔つる意なく、
かれらは聖式の蒸餅を取れど、
わが身やエヴの子——妖蛇に捲かれ、
ゆふべの祈禱も口に出不す。

三

見よ、かのカインはその弟を
うらみて殺せし罪に由りて、

耕す 土 さへ その果を 擧げず、
流浪の身 としも くだちぬれど、
なほ且 ゼホヴの印誌を 給びて、
さすらふ野邊にも 子をば 得たり。
わが身は 却て わが分身を、
神にも 見せず、闇に 遣りぬ。

四

ああ、闇 わが魂 なやめる 闇は、
わが目を 閉して われを 責むる。

こゝろの窓より たまさか 見えて
ひろがる大地は 聲を 叫び、
血しほに 染みたる その口 開けて、
わが身を、罪をも、呑まん とする。
われには ゼホヴを 呼ぶ ちから なし、
ああ、君、わが身は 尼を 断念ぬ。

五

一たび この身に 纏ひはせん と
のぞみし 黒衣は、こゝろ 包み、

見ぬ子の かねの 喪服と 成りて、
わが 苦みこそ 神と 盡さね。
老いたる 主教は あまりに 聖く、
親しき 童貞なみだ もろし。
光を 受けたる 萬物の うちに、
この罪 聴く者 ひとり 君ぞ。

六

君より ひそかに 懺悔を せよの
招きに 断食 — 朝を 來たり、

をみな の 恥辱をば おほへる 被衣
白きに 隠れて、 彌撒を 拜す。
たふとき かをり は 御堂に 満ちて、
高きを 落ち來る 樂の ひゞき —
わが魂 うつらに うれひを 免れ、
まさしく 向ふぞ 神の 御前。

七

ひたすら 唱ふる 誦文の 聲も、
うなじと もろ共 低く 下たり、

十字^{じふじ}を結^{むす}べる小胸^{せうちゆう}を過^すぎて、
わが世^よは地獄^{ぢごく}の門^{もん}にかよふ。
見^みよ、聖^{せい}ミカエル、またガブリエル、
魔鬼^{まき}をば平^{たひ}らげ、道^{みち}を拓^{ひら}き、
天^{てん}より招^{まね}くは耶蘇^{イエズス}の御體^{みたい}、
榮光^{さかえ}は金色^{こんじき}——これや犠牲^{ぎせい}。

八

『生^いきたる人^{ひと}、また、死^ししたる人^{ひと}を
糺^{ただ}さん爲^ためにぞあもり給^{たま}ふ……』

われらは信^{しん}せり、この公^{カトリカ}の
聖會^{せいぐわい}、聖人^{せいじん}……罪^{つみ}のゆるし……』
こは聴^きき慣^なれてし御聲^{みこゑ}と知^しりて、
ふと目^めをあぐれば、思^{おも}はざりき——
わが君^{きみ}、神父^{しんぷ}のくらゐにありて、
香臺^{かうだい}ひだりにひざまづけり。

九

立^たちたり——その御手^{みて}銀水^{ぎんすい}きよめ、
三つなるペルソナいのり念^{ねん}じ、

いのち に 満ちたる 秘蹟 の 蒸餅 を
これ 聖體 とぞ さゝげ給ふ。
その かうがうしさ、その あらたかさ、
われらは 思はず かうべ 垂れて、
「十字架 にかゝりし 主の 肉身 を
をろがみまつる」と 口に 誦しつ。

一〇

かれ、また 葡萄の さかづき 揚げて、
われら に 誦文 を 求め給ふ。

われ はた 唱へぬ、「十字架 の 上に
流させ給へる 御血……」ばかり。

わが胸、忽ち いたみに 觸れて、
仰げば 奥なる 燭 は ゆらぎ、
火かげ の もとより 見知らぬ 嬰兒の
御臺 に あらはれ、「母」と 名みぬ。

一一

神父 の すがた ぞ いよいよ 崇く、
夢路 を くゆれる 香の うちに、

脊せなる 十字じふじは 光ひかりを 放はなち、
死しすべき人ひととも 思おもひ寄よらず。
さながら キリスト、身みづから 來きまし、
わが爲ため 御み壇だんに 懺まご悔げ 聽きくか。
マリヤの 御み胎はらは、あゝ、聖きよかりき——
われ ゆゑ わが子こは 闇やみに 行ゆきぬ。

一一

あゝ、君きみ、わが愛あい、悲かなしき愛あいの
御みたねを さそひて 春はるは 過すぎぬ。

三月みづきの 樂たのしみ、その 悲かなしみは
若わか葉はの かけろふ、野の邊へに 過すぎぬ。
君きみ、聖せい體たいをば 分わけはじめしも、
わが身みは 授さづかる 價あたい値ななくて、
痛いた傷みと 悔く悟いもて 御み堂だうを 退しぞき、
御み空そらの もとにて われを 泣なきぬ。

(二) 闇の横木

一

ああ、日は毛布の黒みを帯びて、
月また血のごとくしほみ來たり、
あめなる星々その軸もろく、
たとへば無花果、地にぞ落つる。

諸天は巻き物おのづと巻きて、
山々島々うつり行きぬ。
わが身は鉛のおもりの如く、
空より釣られて闇を下だる。

二

うづ捲く黒雲練りたる壁と、
わが道かこみて魂を送くる。
刹那ぞ五百里、小暗き坑は
風切るいきほひひやくばかり。

あまりに重きはわが身の罪か、
悔ゆるにひまなく鎖延ぶる――
かしらの黒がみさかしに垂れて、
わが手も便なく、落つる述し。

三

わが息殆ど胸より絶えて、
血しほはむらがる眉のあたり、
忽ち觸れたる横木を握り、
之にぞすがりて助け呼びぬ。

と見れば、鐵門のなかばは引けて、
ひらめく鬼火に――『あはれ、わが身、
着慣れぬころもの薄きを纏ひ、――
こは、早や、他界のすがたなるか。』

四

かくこそ叫びて、思はず泣けば、
『さなり』と闇より答へ聴ゆ。
『いましぞゼゼベル、淫婦の友よ。
額に神より印受けず、

第二の滅亡にこれより入れや。
來たれ」と、くろがね戸びら
いろ青ざめたる馬の脊高く
乗れるは利鎌の黒き死なり。

五

口より出づるは火と
硫黄のほひぞ燃わてのぼる。
陰府、そのうしろにつき従ひて、
わが目を掠むるつるぎあまた。

真近く起りしもいかつちの
どよみは奈落の底に消ゆつ。
あらたに叫びて、悪魔のむれの
寄せ來る地鳴ぞ胸にひやく。

六

われ、身をもだわて、すがれる棒こそ、
さながら裁判の場をや限る。
「よみなる判官よ、わが死の神よ、
しばしのいのちを許し給へ。」

求むる物 あり、われ、そを 追ひて、
來りぬ この闇、暗き 坑に。
ああ、かの 失せにし 玉 だに 得なば
わが身は 陶器、碎く まゝぞ。」

七

馬の脊 聲 あり。『おろかや、いまし、
求むる 玉 には 悪魔 まとふ。
邪淫 の つちくれ さは 戀しくば、
來たりて サタン の 胎内 に入れや。
二〇

かれこそ 赤龍、かたち は 見せず、
なやめる いまし を 近く かこみ、
或夜ぞ ひそかに、産む をも 待たず、
なが兒 を 奪ひて 食ひ去りぬ。」

八

『ゆるせや、見ぬ子 よ、さりとは 知らず—
のろひ は 免れじ — 放ち遣りぬ。
ああ、われ、誰れ にか そを 訴へん、
神より 離れて のぞみ 盡きぬ。』

第一、第二の天使よ、來たり、
終末の管をば高く鳴らせ。
汝が手に燃え立つ火焔を浴びて、
わが身も草木と焼けて失せん。

九

「第三天使の喇叭よ、ひゞけ。
御星の茵蔯、とくも隕ちよ。
われ、汝が苦きに身を投げ入れて、
河水もろともほろび行かん。」

ああ、この靈魂とく滅びずば、
いかでかあがなふ深き罪を。
ああ、われ、誰れにかそを訴へん、
神より離れてのぞみ盡きぬ。」

一〇

物云ふ力もおのづとゆるみ、
すがれる横木を落ちん時し、
わが身を受くべき魔鬼等は失せて、
奇くもやわらぐ胸のおそれ。

この時、『しばし』と、この坑 開らけ、
うへより さし来る 光 見えつ。
聖母の 御すがた いと笑ましげに、
わが手 を 取りて ぞ 熱き なみだ

一一

『若葉』は 朽ちしも、その 靈魂 は
なが身 に 活く』とぞ、あはれ、御母。
わが身 は 引かれて みどりの 雲 に、
こころ も 軽らか 空 を のぼる。――

ああ、君、わが愛、愛しき愛 は、
住む世 を 異にし、いよよ 増る。
ときわ の 樹かげ の いづみ を 汲みて、
また 會ふ 時 を し われは 待たん。

(三) ときわの泉

一

物^{もの}みな 新^{あら}たの いのちを 帯^おびて、
御^み空^{そら}の 上^{うへ}なる 清^きき 住^すまひ――
夜^{よる}なき 國^{くに}には ともし火^び つけず、
日^ひは わが かんむり、おもて 照^{てら}し。

十二の 星^{ほし}々 またゝき 止^やみて、
ちさきは 花^{はな}がた、胸^{むね}を 飾^{かざ}る。
わが身^みも 聖^{せい}徒^との 御^み數^{かず}に 入^いりて、
無^む縫^{ほう}の 細^{ほそ}布^の 白^{しろ}き 給^たびぬ。

二

赦^{ゆる}免^しを 受^うけたる をみな の 凡^{たゞ}て、
こゝには 稚^なき 愛^{あい}の すがた。
マナ より あまきは その 物^{もの}語^{がた}り、
宿^{すく}世^せの 記^き憶^{おく}は 夢^{ゆめ}の 如^{ごと}し。

等しく 光の 白衣をまとひ、
金沙の 御庭に 群るゝさまは、
たとへば 遠野に あまたの 羊、
かすみて 浮べる 脊な に 似たり。

三

あまたの 羊の 飼ひ主、神の
御さかえ 照り添ふ 宮に あれば、
わが身も 溢るゝ めぐみを 浴びて、
楽しき とこ春 晝を 去らず。

たまたま、凝りにし くれなる雲の
花びら 一つを 足に 踏みて、
奇しくも ゆらげる 平和の 袖に、
感ぜし ひゞきは 天の あなた。

四

ああ、その響を 追ひ行く 魂の
羽根より 燃え立つ ほのほ 見えて、
わが手に 生命の 樹かけ を 汲めど、
なほ且 寂しき 涌きぞ來たる。

上^{かみ}にはみどりのあや虹^{にじ}渡^{わた}り、
下^{しも}にはあを海^{うみ}玻璃^{はり}の男波^{おとなみ}、
その透^すき通^{とほ}れる岸邊^{きしべ}を、ひとり、
心^{こころ}は戀^{こひ}しき君^{きみ}にかよふ。

五

ああ、君^{きみ}、わが愛^{あい}、悲^{かな}しき愛^{あい}の
きづなに引^ひかれて懸^かる地球^{ちゆう}にや、
ちいさきバアルの偶像^{ぐざう}の如^{ごと}く、
熱^{あつ}なく回^わりて圓^{まる}く垂^たるゝ。

さは云^いへ、宗教^{しゆきやう}の御光^{みひかり}しるく、
わが目^めに見^みゆるはもとの聖堂^{みだう}、
黄金^{こがね}の香爐^{かうろ}にキリスマ焚^たいて、
君^{きみ}、なほいますか——遠^{とほ}き御聲^{みこゑ}。

六

あまたの悔^くいあるもの等^らの爲^ために
十字架^{じゆじか}の道行^{みちゆき}き、彌撒^{いさ}のいのり、
御壇^{みだん}に焚^たく香^かのけむりと共^{とも}に
纖弱^{せんじやく}にのぼりてあめに聽^きゆ。

あゝ、その聲こそ一條長く、
風なく顛へて胸にひっけ。
來たれや、わが愛、小鳩の如く、
眞白き御羽根に罪を打ちて。

七

わが手は待つなり、巻くべき君を。
わが身は待つなり、いたく君を。
一たび心にしるせし影は、
いつまで相見ず居らるべきぞ。

亡ふることなきわが魂ならば、
いつまで空しく過すべきぞ。
御神はゆるさん、心と心。
影また影とし會はん時を。

八

「祈禱のうちにばわが愛ありと、
君はも下界に歌ひ給ふ—
その愛、その君、今幾萬里、
へだつるわが身の聲も聴くや。」

「祈禱の うちには 生命を 寄す」と、
君はも 下界に 仰ぎ給ふ――
いのちよ、わが君、今 幾億里、
へだつる わが身の 聲も 聴くや。

九

ああ、君、わが愛、悲しき 愛は、
主の 日ぞ 来らば、報 得べし。
七の 封印 六つ まで 開らけ、
とく その あめ地 消えも行けや。

ちいささ バアルの 偶像の 如く、
熱なく 回りて 垂るゝ 地球こそ、
その時 全く かげなく 失せて、
君はも 御空に 来ますべきを。

血ぬれる鐘

「いかで、おきなよ、われ等ふたり、
花見がてらのおもひ出に、
春もどかの空に高く
古き鐘をば撞かしめよ、
いかで、おきな。」

「いかで、——おろかや、君は酔へり。
さくら 柵引くうらゝ日も、
われは目醒めて、うつる時を
かぞへ居ればぞ、みやこ人、
ほろび 近し。」

聴いて、暫しは、めをとふたり
目をば見かはし震ひしが、
声もをみなはあだに笑みつ。
「されば、生れも來たるもの

さわに あるを。』

『さなり、生るゝ子等もあれど、

死ぬるものらは歸り來ず。

若き乙女のかほに見えて、

つひに隠るゝいろ香こそ、

これやほだし。』

『これやほだし』と、酔へるをのこ
手もてをみな肩に觸れ、

三八

『などておきなは斯くも沈み、

あまきさかづき受けやせぬ—

鐘を撞けよ。』

『さなり、刹那は死をば呼びて、

鐘ぞ鳴る時やがて來ん。

若きをのこの胸に燃えて、

つひにひろがるねたみこそ、

これやおそれ。』

三九

「いかで、おきな」と、めをとふたり
撞きに迫れば、その前を
低きうなりの聲ぞ過ぎて、
かれは忽ち夜叉のごと
狂ひ立ちつ。

『待て』と遮ざるさまにおちて、
かれらふたりは退きつ。
『許せ、おきなよ、無禮げなりき—
こはも何ゆる世には斯く

よき音 出だす。

『さらば、君よ』と、こゝろ解けて、
かれは語れり。「この鐘は—
云ふも苦しや—われに生命、
あはれ、わが戀、わがおそれ、
これやわが世。

「君よ、三十とせむかしなりき、
われは山門—寺をとこ、

妻つまに親したしき小姓こしやうありて、
われは之これをば疑うたがひぬ——
若わかき時ときぞ。

「時ときのこ小姓しやうは今いまや智識ちしき、
名なある御寺みでらを領りやうすれど、
けがれ無なき身みの徳とくに照てれる
眉間まへまに傷きずあり。——われこそは
罪つみぞ深ふかき。

「妻つまはいたはし、こゝに走はり、
此世このよのわかれを苦くるしみつ。
血ちもて無罪むざいをこの裏うらに
しるし終はりて、われを見みき——
斯かくは云いひぬ。

「君きみはこれよりわれをまもり、
朝あさな夕ゆふな鐘かねを撞つけ。
人ひとに知しらるゝ時ときし來きなば、
いのちなき身みと思おもへよ」と、

これや わが世。

『晝の光を闇につゝみ、

罪の根のみははびこりつ。

わがまぼろしの影ぞ薄く、

響くおとにもおそれあり――

われは老いぬ。

『されど、寂しき脈にさへも

今やむかしの血は湧きぬ。

若きいましのすがた見ては、

またもわが身の春は來ぬ。

こゝろ苦し。

『むしろ死ぬるによきは今日ぞ、

われは最後のかね撞かん――

低きうなりの聲ぞ來たり、

かれは忽ち夜叉のごと、

狂ひ立ちつ。

『待て』と、身づから 返り見つゝ、
めをと ふたり を ためらひて、
『君は この場 を のがれ給へ——』

わが身 苦む さまをこそ
遠く 聴けや。』

* * * * *

鐘 は ひゞきぬ、春のゆふべ、
花のふゞきを 散らしつゝ。

鐘 は ひゞきぬ、春の床を
酔へる 人らの 歸る時——
かれは 如何に。

『あはれ、お竹よ、けふを共に
この世 離れん、さらばぞ』と、
一つ 撞きては 胸をもたえ、
二つ 撞きては 身をもたえ、
まろび 伏しぬ。

あくるあしたの 花の夢を
 覚ます ひびきは 聴え来ず。
 あはれ、もろきは 血しほのみか、
 さしも 名高き 唐かねも
 朽ちて ありき。

田戸の海ぬし

—

田戸に 山崎、
 また 堀の内、
 走り水にも、
 また 大津にも、
 春のうしほは
 朝ゆふ 寄せて、

けむる 霞かすみの

奥おくより 見ゆる、

淡あはき 猿島さるじま、

島しまとは 云いへど、

田戸たどの おやぢが

巢すにこそ 似にたれ。

二

おやぢ、頬ほ根あかの

かほむき出だして、

鬢びんの ほつれ毛け

二すぢ 三すぢ、

風かぜに もまる、

小舟こぶねの上うへを、

あさは 沖おきより、

岸きしより ゆふは、

かろく あま飛とぶ

小鳥こどりの 如ごとく、

しゅッしゅ 漕こぐ手ての

手てなみも 速はやし。

三

おやぢ、その名は

猪ノ助ぬしよ、

海に生れて、

海をぞ戀ふる。

妻はあれども、

また娘はあれど、

ありしむかしの

血氣の名残。

ゆるし得ぬ子を

お濱に抱かせ、

かれは寂しき

おもひに浮ぶ。

四

妻のおやぢは

七九に失せて、

今はその子も

死ぬべき時を、

一つ軒端のきばに

おなじの住すまひ、

もとの仲なかにも

返かへらば返かへれ、

二十三年ねん

共ともには住すめど、

ひとりびとりの

むしろをしとね褥しとね

五

上總かづさ、房州ぼうしゅう、

かすみかすみに醒さめて、

曉あけのひかりひかりに

猿島さるじま浮うけば、

おやちおやち頬ほ赧あかの

かほかほむき出だして、

またもまたもきのふの

舟唄ふなうたあはれ。

しゆしゆッしゆしゆ漕こぐ手ての

田た見み手てなみなみをを見みせて、

田戸と島との
わたしを通ふ。

六

過ぎし時代の
ちよん鬘結ふて、
鬘のほつれ毛
二すぢ三すぢ。
おやぢ、もとより
その歳知らず。

問へば、『わが身は
死ぬことなし』と。
浦の人々
うやまひ懼れ、
田戸の海ぬし、
こはその稱へ。

七

むすめお絹が
世を知らそめて、

父母の仲をば

返すとすれど、

母は寂しく

縫ひ物つゞけ、

『あれは龍宮の

いたづら小僧。』

猪ノも笑みつゝ、

かたへに立ちて、

『されば——汝が父、

身は海坊主。』

高地の靈語

ああ、造化の一角なる

二百零三高地よ、

識あつて待ちしか、この

非情非理の亂り世。

人は文明たへて、

あまき酒にほろ酔ふ。

されど、なれは血に醒め、
闇の如く寂寥。

うちに つゝむ 地熱の
深き光 かすめつ、
ひとり 寒威 零度の
空に 高く そびえつ。

脊には 死屍 かさなり、
谷には 人の 腹わた、

雪に 赤く 染まるは
うちし 敵と その仇。

野犬 こゝに 來たりて、
性を 更へし おほかみ、
凍る肉を 食みても、
誰れを 恨む この民。

のろひ 多き 罪をば、
嗟、なまぐさく 吹く風。

われは 之に 乗りて ぞ
渡り來ぬる 死の畔。

骨と 骨の 間に
祝ひ の 種 播きたり、
肉と 肉の 間に
萌ゆる 種 を 播きたり。

百年 劫果 含めて
あざり行かん その種、

とこしなへに 新たなの
生命 延さん その羽根。

嗟、再びは のろはで、
風よ、北に 舞ひ行け。
われは 邊明 の 靈 なり、
西にこそは のび行け。

さらば、高地 — わが 乗る
駒 は ひかる あげぼの、

遠く進むすがたを
今ぞ見よや、ほのぼの。

旭日吟

(遊子、故郷の濱邊に立ちて)

(一)

ああ、とこしへの朝日子よ。
緑したる松原に、
あしたの浪をかき分けて、
登るすがたの勇ましき。

われも 初^{はじ}めて、朝^{あさ}がすむ
けしき ぞ いとも 麗^{うる}はしく、
この世^よに 生^うれ來^こし 時^{とき}は、
かくや いきほひ 猛^{たけ}りけん。

ちから 限^{かぎ}りに 泣^なく聲^{こゑ}の
いづる 涙^{なみだ}に うれひ なく、
自由^{じゆう}に めぐる ひとみ には
ちりも 穢^{けが}れ は とゞまらず。

五^ご感^{かん}の もとゐ 明^{あき}らかに、
まよひ の 風^{かぜ}の 吹^ふき立^たたず、
母^はの 乳^ちぶさに 口^{くち} 觸^ふれて、
清^きき いのち を 呼^こ吸^きしつ。

いはひ、よろこび、樂^{たの}しみの
うちに 育^{そだ}ちし そのさま は、
なが み光^{ひかり}の まのあたり
いや増^ます ごとく ありにけん。

(二)

ああ、とこしへの朝日子よ。
緑したる松原に、
あしたの浪をかき分けて、
登るすがたの勇ましき。

われ學問をならひ初め、
ふみ讀む机前にして、

夕べに至るその頃は、
かくやたゆまで勉めけん。

ころもを振ふ千仞の
岡を觀じて意氣高く、
この大丈夫足洗ふ
萬里の流れ身に秘めつ。

人は云ふてふ螢雪の
たとへも愚か、夜更けて、

鳥の啼く音にほゝるみの
かげもの云はゞ、如何なりき。

心のうちにのぞみあり、
身の苦みをことゝせず。
學の道にさちありて、
胸にまごひのひま出です。

たゞ一すぢにわがちから
進み行く世の樂みは、

なれが日足のすぎすぎに
とよさか登るさまにこそ。

(三)

ああ、さりながら、朝日子も
高きにつれて名を得じや。
ああ、朝日子も曇りなば、
深きあはれの動かじや。

戀と名譽の二すぢに
わが道分れ入りてより、
われ疑ひをいだき初め、
われ悲みを感じ來ぬ。

(四)

われ初戀を知りそめて
若き血しほに觸れてより、
もゆる思はあめつちの

果にも渡るこゝ地しつ。

われには餘る苦みを
詩にも歌にも歌へども、
胸に秘めたる一たまの
たから示さん折失せつ。

その麗はしきをとめ子の
行る追ひつゝ、幾歳か、
嘆く目あてのなきまゝに、

そは 只 おなじ 箱 なりき。

再び めぐり會ふ 日 さへ、

ありし 昔は 語れども、

わが寶 こそ 奥深く

ひそみて 光 なかりけれ。

然れど、ひそかに 取り出で、

放てば、闇 も かゝやきの

風 に 吹れて、絶壁 や

高き をとめ の 立てる 見ゆ。

呼べど、答へず。ほゝゑめど、

かれ 喜び の 色 見えず。

ああ、まぼろし か、足引 の

山 の ふもと ゆ 崩れつゝ。

ひらめく 袖 は 薄がすみ

あかき に 消えて うつり行き、

浪立つ 髪 は 青雲 の

白き御空にかげもなし。

ああ、われなやむものなりや、
こゝろの平和絶えてなし。

ああ、わが思深うして、
櫻むは熱き夢ばかり。

(五)

われ名を求めそめてより、

空しく爰に年を経つ。
秦の始皇が英略も、
われには靴の塵と見え。

三千宮女亡びては、
野中の花といづれぞや。
万里の城もくづほれて、
下行く水とまたいづれ。

ああ、アルプスの高きより

敵の平野を見おろして、
おのが立ち場の雪を蹴つ、
うちほゝゑみしナポレオン。

ウオータルロー草茂く、
吊ふ虫の音にも聴け。
英雄、ひと日、雲晴れて、
セントヘレナの月如何に。

消えて残るを「名」と云へど、

ありて實なきこれ如何。
老子一たび「無」を叫び、
姿を深くつゝみけり。

ああ、功名にあくがれて、
われは迷ひしこともあり。
頓悟の域に身を入れて、
さると見えし時もあり。

(六)

ああ、疑うたがひの なかりせば、
如何いかに 樂たのしき 世よなりけん。
ああ、悲かなしみの かげ なくば、
如何いかに うれしき われ ならん。
さばれ、樂たのしと 云いふ もの、
亡ほろび 行ゆく べく 定ただまらば、

うれしと 見みゆる その事ことの
つひに 消きゆべき ものならば、

見みよ、夏なつ草くさの 生おひ 立たてど、
露つゆの もろきに 就つくごとく、
わが 疑うたがひと 悲かなしみの
長ながきを むしろ いのち なり。

「無限むげん」の 池いけに 石いし 投なげて
面おもに ひろがる さ々浪なみの、

一輪 一輪 に 亂れ來て
「われ」てふものは 拾ひ得ず。

(七)

ああ、朝日子よ、とこしへに
若き姿ぞ麗はしき。
われはわが身を求めつゝ、
かくも心はうつろひぬ。

うつる心に 且は又

「死」てふなやみの 加はりつ、

東西 光 うすらぎて、

南北 闇に 消えんとす。

さびしく 立ちて 夕風の

そよぐに まかす 墓ならで、

戀も 名譽も 疑も

やすらに 受くる 神なきや。

(八)

ああ、われ、今や、故郷の
濱邊に立ちてもの思へば、
昔ながらのあけぼのに
わが魂は湯あみしつ。

千重の男波をかき分けて、
静かに登る朝日子よ。

無限の亂れ引きまとめ、
われを圓きにし就かしめよ。

伊吹の螢

伊吹山 木々 失せて、

生ゆる 草葉 短し。

夏の 夜風に しめり、

煙草の 火も 冷たし。

けむり 直ぐ 消ゆれども、

消えず 残る 光よ。

時に 後れし ほたる、

あはれ、重く 飛ぶ 見よ。

さかりは 十日 過ぎぬ、

名ある 宇治に 石山

おのが 同士と 別れ、

いかで 寒き この山。

何に こがれて、 斯る

こゝろ 細き さまよひ。

わが身はじめて愛しき
なれを見たり、この宵。

暗きともし火つけて、

風になやむその様、

ふわり、ふわりと靡く、

二つ三つの人魂。

恨みあるものとせば、
後生の爲め、くよくよ、

ことにことづてすとや、
わが頭上を渡るよ。

さらば、無言の身こそ、

われに寄するなが骨。

あはれ、露には瘦せて、

高きを慕ふこころ根。

螢を踏みつぶせる折に

風かぜに涼すずしき夜よなか、

栗津あはづが原はらののみちへ、

かげも撰えらばでとまる

ほたる、何なんのいけにへ。

病やめるものならば、右みぎ、

ひだり、流ながれもあるを。

廣ひろきまなかに出いで、

犬いぬに食くはる生なまうを。

小ちさきその羽根はね折をれて、

飛とぶに苦くるしくば、また、

草葉くさばに逃のがるべきを。

投なげて、蛇へびの腹はらわた。

無駄むだに亡ほろべと、よもや

神かみもつくり置ちかざらん。

觸るゝを避けて、ともす
その火、頼む爲めならん。

それも罪なき蟲に、

噫、入らぬ取越し苦勞。

之を憐む味かた、

敵となりしを吊らう。

高きわが下駄の齒に、

松を漏れて生き死ぬ、

月の光を踏まで、
あはれ、なれをつぶしぬ。

雲 翻 々

ああ、翻々として飛ぶ雲の
妙なるさまを仰ぎ見て、
速きあらしの袖漏れし、
わが身の行ふ思ふかな。

見よ、見よ。

古人も歌ふ「はたて」さへ

ちぎれ、ちぎれて、また別の
形を浮ぶその色や、
濃きを逃れて、風足の
薄き端には光あり。

いや白きそのひかり、
照らすがまゝに染りつゝ、
一朶一朶に入れかはり、
また立ちかはる、そのかげの
先きを争ひ走れども、

一步はづせば、幾万里
それ 幾万里、青き空。

如何なる 靈の 乗るなれば、
かく 安らかに 渡るぞや。
われは 片羽を うち折りて、
胸に 憩ひの かげもなく、
上に 向ひて あせれども、
あせる ほど、遠ざかる。

ああ、手は 亡び、足 亡び、
からだは 亡び失する 時、
雲よ、ながごと、白妙の
のぞみや われも 分ち得ん。

常世の光

(ゲリユックの『ダイアナ讃歌』の曲に合わせて新たに作れる)

あめ地 初めて 二つ に 分れ、
御空 を 踊りて 照り出でたる 光。
とこ世 の おもて を 籠めたる 闇 は、
音なく 破れて かゝやき渡り、
四隅 は 新たに くらゐ を 定め、
よろづの物 皆 生命 を 浴びぬ —
あめ地 初めて 二つ に 分れ、

御空 を 踊りて 照り出でたる 光。

静けき とこ闇 おのづと 破れ、
御空 を 踊りて 照り出でたる 光、
御神 の 夢 より 漏れたる 笑みの
くらき が 中を や かゝやき渡る。
物 皆 新たに 形状 を 受けて、
生命 の 流れ は 四隅 に 振ふ —
あめ地 初めて 二つ に 分れ、
御空 を 踊りて 照り出でたる 光。

ねむりは醒めたり

ねむりは 醒めたり、わが 國民よ、
千歳 ったはる 御稜威を 仰げ。
けはしき 山々、するどき 流、
どよめく わだつみ、かすめる 野原、
皆 呼ぶ、皆 呼ぶ、わが 日の本を。

ねむりは 醒めたり、わが 國民よ、

二千年 重なる 榮えを 開らけ。

家國の うれひも、その わづらひも、
われらが 希望も、はた いきほひも、
皆 呼ぶ、皆 呼ぶ、わが 日の本を。

ねむりは 醒めたり、わが 國民よ、
三千とせ 鍛へし 歴史を 振へ。

世界の 文明 なやめる ひまに、
われらが 理想も、はた 藝術も、
皆 呼ぶ、皆 呼ぶ、わが 日の本を。

進むは生命、拓くはいのち、
皇祖の御教へそのうちにあり。
一つの言葉に不易の御門、
國是の發展この民にあり。
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

われらが日に日に求むるものは、
劔にあらざる御靈の光。
常世を貫くちからに依りて、

仁義の寶を亞細亞に護せん。
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

ねむりは醒めたり、わが國民よ、
三千とせ鍛へし歴史を振へ。
世界の文明なやめるひまに、
われらが理想も、はた藝術も、
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

ソ

子

ト

(二十二篇)

一 海の響

夢は、おぼろの花の如く
咲きて見ゆれば、冬の床も、
ゆふべ寂しき海を出で、
龍の宮居の玉座なりき。
ねむり、南にかしら沈め、
沈むかしらに香ぞかゝる。
肌につめたき絹のさわり――

これや寐ざめのかをり遺す。

ひとりあたくか胸のうれひ、
臥して、聴ゆる濱をたどり、
ものに酔ひたる乙女すがた、
いともしなやか浪ぞ寄する。
あはれ、かくこそ死にも入らめ――
海のひゞきよ、永劫のおもひ。

二 無言の石

云はず、語らぬ石をいだし、
われはこの世を泣きに泣きぬ。
人のいふなる戀にあらず、
おのが受けたる苦にもあらず。

苦にも、戀にも更らに増して、
胸のさびしみあふれ來なば、

もゆる思ひの肉は焼けて、
なみだばかりぞ熱く流る。

われに神なく、且は死なく、
ありといふべきこのかなしみ、
今や生命の糧となりて、
つきぬわが世は石と共ぞ。

かれは「無言」を絶えず生めば、
われはなみだをそゝぎ繼がん。

三 自然のあゆみ

岩をめぐりて行くは何ぞ、
河つ姫にや、河つ男にや。
音は立つれどすがた見せず、
見せぬすがたの裳裾觸れて、
こゝに白ぎぬあとを引くや。
行けよ、流れよ、はやき水の

澄みて盡させぬ深き道を――
自然のあゆみも斯くぞあらん。
われは物もひ立ちて居れば、
目には静かのかげも浮きて、
身さへもろ共岩をめぐり、
隠れ去るらんこゝちすなり。
岩をめぐりて行くは何ぞ、
河つ姫にや、河つ男にや。

四 残る憂ひ

われは 高き 磯邊の
岩に よりて 黙せり、
遠つ海 の 疾風の
音に、日さへ かげれり。
こゝろ のみぞ、この胸
深く 照らす 真帆船。

馳ける 道に 一すぢ
残る うれひ 悲み、
白く 曳いて 消え行く
天靈の 跡ぞ 身に 入み、
われ の 顔ひ おのゝく
肉を 破る 寂しき。
あはれ、立てよ、わが魂、
なれの 領ぞ この濱。

五 細き指輪

ほそき 指輪ゆびわ の ぬし は あらん、
君きみ は 御手みで をば 固かたく まもり、
大理石だいりせき もて 成なれる 如ごとく、
人ひと の 觸ふる、を い避け給たまふ。
うべや、ゆかしく 歌うたふ 譜ふには、
高たかき しらべの 籠こもる 見みえて、
海うみの 四方よもより 渡わたる 風かぜも

こゝに 合唱がしやう の あまつ樂座がくざ。

君きみよ、御空みそらに 戀こひは すとも、
しばし 真砂まさごの 上うへに 坐すはれ。
春はるの かげろふ はゆく 燃もえて、
白しろき砂すなにも 熱あつは あるを――
いづれ 卷まかるゝ 身みにし あらば、
來きたれ、ひとしく あつき 胸むねに。

六 春の歌

六 夢の子

あはれ、わが身の戀を云はゞ、
色は紫紺のとばり深く、
奥は紙燭の火かけ暗く、
胸のほのほの燃ゆる上を
すぐる夢の子——あとを向きて、
「来たれ、いまし」と、ひそか聲の
なほも小暗く、深き奥に、

身をば糸もて引くに似たり。

されど、覺むれば、朝のひかり
窓にわが身のねむり吸ひて、
いとも樂しき夜間のおもひ
晝はかわける世こそわぶれ。
君にあかるき定命ありて、
われはこをしもうつし得じな。

七 薰ゆる火かけ

ともし火もてるは如何なる子ぞや。
闇夜のあらしにゆらぎて立てど、
なほ且その影大地に投げず。
照らすは世の様、世の有様の
奥なるほろびと、そのかなしみと、
沈めるいのちの流れと愛や。
常世をつらぬぐ光のすゑの、

漏れ来て、あたりにくゆるよ、火かけ。

聖なる御堂の神壇に載れば、
或は教職キリスマ焚いて、
十字架を導く脊なにも照らん。
さは云へ、こはまた移しも得じな。
ともし火もてるは如何なる子ぞや、
闇夜のあらしにゆらぎて立てり。

八 とはの寂しみ

夢ゆめに地獄ぢごくを深く探たづり、
奇くしきともし火ひわれは得いたり。
ほのほ、うれひの色いろに照てりて、
あをさ光ひかりは死しをぞ招まねく。

聖きよき御山みさまの堂だうに燃もえて、
世々よよに傳つたはるそれの如ごとく、

永劫とこのさびしみこゝに引ひきて、
暗くらくそのかけゆるゝのみぞ。

すゝる運はきびて、此世こゝに取とれば、
活いけるそよ風かぜ照てりを増ましつ。
佛ぶつ龕こんの御佛みほとけいのち映はえて、
われはおのつと合掌がしやうなしぬ。

夢ゆめはさめたり
君きみはわが身みにいのち投なげず。
されど、いまだ

九 檉の木

傳教大師が印度の地より
得來てし檉の木、根を一もとの
枝葉は高きに繁りてあれど、
その幹なればも、その根のもとも、
寂しや、分身の若芽を断ちて、
たとへば英雄子なきが如く、
天台教理を絶する如し。

藏、通、別、圓、四教のうち
三千寺坊のかげさへ消えて、
今はたいつくに昔を訪はん。
大師が入淨以來のをしへ、
高きを遺して、利機をば生ます。

あはれや、檉の木、御山にひとり、
法燈暗きを護るに似たり。

十 小暗き道

われは 夢見ぬ 君とふたり、
つらき 無言の裏を いただき、
胸の奥なる 熱に 觸れて、
深き 真洞の底に 落ちつ。

うすく ほのめく 燈火影に
前の 御かほぞ
いかに、あはれ

いとも 白けて、ねむる いきも
既に 絶ねたる 身ざま、死さま。

膝に つめたき むくる 一つ、
重き 呼吸は 身にも 迫る。
上を 仰げば、黒き石の、
『罪』と 叫びて、おほひ下たる。

さなり、わが魂、これを 避けて、
なほも 小暗き 道を 戀ふる。

十一 まとふ怖れ

われは 夢見ぬ 海の上を
君と 二人し 蛇に 巻かれ、
舟と もろ共 深み空の
あをき 最中に 吞まれ行くよ。

力ある 胸浪と どよみ、
熱き こゝろ は 雲と 振ふ。

われに 君こそ 斯くて あらば、
まとふ おそれの 何か あらん。

舟や かたむけ、潮よ 来たれ、
なほも 海へび かたく 巻けよ。
おなじ 燃え立つ 火焰 あげて、
吞めよ、下せよ、沈む 身等を

あはれ、安かれ、君の かげは
われぞ 死までも 送り行かん。

十二 うれひ一すぢ

鐵のうるしを練りし壁と
固くとちたる、闇を破り
曉の光の照らす如く、
わが身胸よりつらぬかれて、
いなく希望はけふも亡び、
うれひ一すぢ流れ去りぬ。

ながれ去りにしうれひなれど、
またも覺むれば、またも來たり、
沈むころの目には見えて、
遠く地平の線に渡る。
君はかくこそわれを引きて、
ひろきこの世の野邊に住むや。

われに流れて入るか、去るか
うれひ一すぢ、今はいのち。

十三 時劫の森かげ

時劫じこくの森もりかげ露つゆはしとゞ、
わがおほ御神みかみの足あしを受けず、
重かさなる落葉おちばの下行したゆく水みづは、
岩いをばめぐりて人ひとを刻きむ。

小暗こくらきうちよりかしら見みえて、
無言むごんはその世よをつゝむ時ときし、

重かさなる落葉おちばのゆらぎと共ともに、
延のびたり大だいなる右みぎ手てと左ひだり手て。

身みづからその手てを樹きにはかけて、
見みよ、立たち上あれり石いしのすかた。
あらくれ男おとこの胸むねいと廣ひろく、
常世とこよの風かぜをばこゝに汲すひぬ。

ああ、かれ、戀こひなく、苦くるみなくに、
はじめてこの世よに出いでんとするか。

十四 いさゝ聲

重く垂れたるおのが髪を
取れば、「母よ」といさゝ聲の
脊なをめぐりて、膝に下だり、
酷きこゝろの目には見えて、
兒等のうす影胸を纏ふ。
打てど、拂へど、數を知らず。

神のアバドン、蝗率ゐ、
爐なるけむりに涌くが如く、
宿世來世の風に乗りて、
つぎへつぎへと群るゝ影に、
おそれおのゝく、寂しゆふべ。
かれはをみなと生れ出で、
産まず、生れぬ刹那追へど、
なほも等しく産の苦あり。

十五 鍵を與へよ

鍵を 與へよ、陰府の 鍵を。
いづれ 死ぬべき もの、身もて、
われは あめなる 門を 戀ひず。

あめに 空しく 君を 入れて、
清き 天使を 見なん よりも、
あめに 空しく 君に 連れて、

清き 天使と ならん よりも、
われら 諸共 身をば 投げて、
暗き 真洞に 沈み行かん。

鍵を 與へよ、陰府の 鍵を。
われら いち度も 二度も 死にて、
胸の うれひを 深うしなば、
雲の 消えては 見ゆる 如く、
戀の 記憶ぞ 朽ちず あらん。

十六 鏡を碎けよ

鏡かがみを碎くだけよ、わが姉あね、妹いも、
映うつれるすがたは皆みな穢けがれたり。
世よに戀こひありとは心こころのまよひ、
振ふり袖そで重おもきを左手ひだりてに取とりて、
その身みの穢けがれを飽あくまで泣なげや。
なが夫つま、なが戀こひ、なが依よるはしら、
いづれも右手みぎてには遠とほきを引ひいて、

近ちかきは夜よるの戸と、空むなしきむくろ。

仇あだなる小こ夢ゆめに酔よひたるこの世よ、
誰たれをか恨うらみん、をみなの魂たまよ。
酒さけの香か高たかきに口くちづけすとも、
醒さむればあしたのむくろとむくろ。
鏡かがみを碎くだけよ、わが姉あね、妹いも、
映うつれるすがたは皆みな穢けがれたり。

十七 蛇の河姥

むかしこの石天を落ちて、
此世の小春に目をば覺めぬ。
へびの河姥之を慕ひ、
うろこ輝く腕に巻きぬ。

石は泣く泣く羽がひ折りて、
水に投ぐれば、右の羽根は

瀬をばのぼりて鯉と浮び、
折れし左は鱒と下だり、
落つるなみだは一つ毎に
ちさき尾ひれの数を産みつ。
年にいち度は、眷屬すべて
こゝに過ぎ行く世をぞのろふ。

秋の月夜を深く覺めて、
聽けよ、宿世の『われ』や如何に。

十八 熱き眞砂

熱き 眞砂 の 上 を 撫で、
われは 獨り し 物を 思へば、
遠き 深み の 波浪 は 打ちて、
手なる 下より ひゞき來たる。
おのが 小胸 も 爲めに 振ひ、
千々の 亂れ は 濱 の 小砂利。

なれよ、小砂利 よ、ひろき 海 に
幾代 打たれて、斯くや 圓き。
なれを 讀みつゝ、ひろひ行けば、
ひとつ ひとつ に 光 添へて、
經にし代 をこそ われに 語れ。

あはれ、海邊 の 熱き 砂利 よ、
此世 は 萬年 永く 繼げば、
われも いまし の 年 に 添はん。

十九 酒興

注げや、わが愛、今一ちよくを。
明日は酒興の來べきを知らず。
ふたりこの日を、手に手を取りて、
こゝに歡樂満つれば満つる。
誰れか酒の香あましといふや、
なれがいろ香も褪す時あるを。
さなり、けふのみ、たゞこの刹那、

われは心に自由を得たり。

天を呼ぶ君、地を撃つわが身、
しばし短きいのちに酔はん。
明日は、醒むれば、またこの愛の
おなじ味はひ得べしや。君よ、
時劫、見えざる鎖を曳いて、
われは悲哀に繋がる身なり。

二十 悲哀の俘

酒に 向へど 憂愁は 去らず、
取れる 盃なみだを 湛ふ。
こゝに 酔へる は わが肉のみぞ、
いづこ 如何なる 心の糧よ—
遠き 奥より かなしみ 曳いて、
君よ、わが身は 悲哀の 俘。
失せし 戀とな かまへて 問ひそ、

胸の 苦悶を 刻む は 久し。

この世 なつかし、この世は 憎し、
これや われのみ 醒めたる こゝろ。
いづれ 亡ぶる この胸、この身、
私慾 私憤に 敵あるべしや—
遠き 奥より かなしみ 曳いて、
君よ、わが身は 悲哀の 俘。

二十一 苦悶の鎖

(故野口寧齋君に)

ああ、君、苦悶を いたいて 逝きぬ、
わが身は なほそを 胸にし 生くる。
生くる と 死ぬる は、例へば 影の
その身 に 添へると 添はぬ に 似たり。
父母より 受けたる この世の もだえ、
一息 毎にも いのちを 刻み、
その音 天地の 間に 落ちて、

久遠の さゝ波 その輪を ひろぐ。

ああ、君、その輪の ひろがる なべに、
底なき 記憶の 淵にや 沈む。
わが手を 延ばして 救ふと すれば、
残るは まぼろし 苦悶の 鎖。
延び行く その端、君、今 陰府に、
われ 他の端をば こなたに 握る。

小叙
曲事
脱

營

兵

はしがき

先に同じ學窓に學び、後に同じ藝術に従事すれども、生と其方面を異にして、専ら音樂に熱心なる北村季晴君よ。生はこの叙事小曲を君に献す。わが國現今の状態に在りては、その作曲並に演出の上より、直に歐西の歌劇又は音樂劇の如きものを望むの到底不可能なることは、君も平生之を口にするところ。之に志あるものは、先づ、詩樂共に、易きより始めざるべからず。この曲、また、僅かに中幕物に償するもの、且、唱歌者の勞を省く爲め、普通のせりふを加へ、また、叙事の文句をも入れたり。舞臺にのぼる唱歌者の稀なる今日のことなれば、男聲女聲の獨唱も、長きところは、機に應じて、その中間の一部を、叙事の文句と同じく、樂座の合唱となして可也。願くば君、之を嘉納せんことを。

明治三十八年五月

著者識。

脱營兵

(本舞臺、中央にアーチ形を構へ、その内は凡て凄愴たる墓場、月夜の景。下手、アーチ形の側に、樂座の設けあるべし。)

樂座(合唱)

小夜吹く嵐もねむりに入りて、
奈落の孤寂を招く頃、

並み立つ 石塔 荒れにし 庭を
照らす は 月かけ — 人の影。

(脱營兵、おづおづ登場。)

脱營兵(獨白)

ああ、營所をこゝまで逃げては来たが、心
はわしといふ身體を逃げることは出来ない。
—— 今日、國元から手紙が来て、開けて見
れば、女房が二人の兒を遺して死んでしま
つたと—— その上、永年世話になつた、義

理ある母の大病。二人の兒はどうして居る。
村のものと云つては、いづれも、揃ひも揃
つて薄情な人ばかり。不斷から、わしの家
を穢多同様に取り扱ひ、—— とても、世話
を見て呉れやう筈はなし。—— これは、御
國の爲めには悪い事と知つては居るが、兎
や角の心配から、透を見て、營所を逃げて
来たもの、—— あとはわしが自訴して出る
とも、また、百萬の軍隊でも出来ない奇功
を、わし一人をやつて死なうとも、それは

わしの決心一つにあるのだ。——ああ、それにしても、胸がどきまぎして、もう、今から地獄にでも落ちて居る心持がする。この物凄(ものすご)い墓場は、たゞ無言(むごん)で、わしを笑つて居るやうだ。もう、かうなつては、頼(たよ)るものは神、佛、ばかり。——どうか、神さま、佛さま、暫くわたしが自由(じゆう)を許して下さりませ。お袋(ふくろ)の様子(ようす)さへ見て、安心(あんしん)が出来ますれば、この身體(からだ)は粉末(こな)微塵(みじん)になつてもよろしうい升。頼(たよ)み升、頼(たよ)み升。

ああ、何(なん)だか胸が苦しい。——それはさうと、この邊(へん)に尋ねて来た墓(かぶ)のある筈(はず)。——
—— おお、之(これ)が女房(にようぼう)の埋(うま)つて居るところか。——
—— お民(たみ)、もう、會(あ)ふことは出(で)来(き)ないのか。子供(こども)を残(のこ)して死(し)んだ上に、今(いま)、お袋(ふくろ)の大病(だいびょう)。わしは御國(みくに)へ對(たい)して濟(す)まぬことだが、營所(えいじょ)を逃(に)げて、こゝまで歸(かへ)つて来たわい。情(なさ)けないことになつて呉(く)れたなア。—— おお、向(む)ふを來(く)るは何(なん)者(もの)。

樂座(合唱)

その影 あり とは 知るや 否や、
足音 ぞ ひそみて 進み來る—
罪ある者 をば からめ取る と、
悪魔 の 一隊 か、はた 追ひ手。

脱營兵(白)

やア、こは不思議の怪物ども。——どこかに隠れて、やり過して呉れう。

(と、隠れる。)

樂座合唱

死を さながらの 深き夜に、
出で來たりけり 魔鬼の 群—

これや 羅刹。

(どろ／＼にて、覆面黒衣の怪物、數名登場。そのうちの頭領、運命神、奇なる杖を以て他を差圖し、脱營兵の隠れ居るを示めす。)

樂座(合唱)

天綱 のがれ難し、
運命、 人を のろふ。

(脱營兵、恐れおのゝく。怪物、無言にて、之を引
き出す。運命神の杖、鬼火を發す。渠、之を差し
延ばして、その尖をまわせば、脱營兵くるく
るまわる。)

運命神(獨唱)

影よ、影よ、
人は影なり。
闇を食ふ
人は影なり。
黒き杖の影なり。

ちから 結びて、

われは こゝに

汝を のろはん。

劫風、毒龍、ラルロ。

(杖を以て印を結ゆ。)

樂座(合唱)

杖もて 印を 結べば、
先づ 露兵 現はる。

(露兵、二名現出。運命神、消ゆ。)

露兵一

やア、こは日本兵。

露兵二

何、日本兵が――

(兩兵、左右より脱營兵を蹴る。)

露兵一

われらは日本軍の爲めに殺され、遂に冥途へ送られたが、

露兵二

一六〇

今、呼び戻されて、来て見れば、こゝに憎き日本の兵士。

一六一

露兵一

さいはひ、意氣地のない様子――

露兵二

こゝが最も良い仕返し時――

一、二

綱を以てしばつてしまへ。

(脱營兵、縛せらる。)

樂座合唱

その 奇しき 綱 には、
千斤 の 魔力 あり。
その 重き 繩目 には、
人、手 さへ すくみたり。

露兵一、二

えい。

(と、また蹴り倒す。)

樂座(合唱)

家なる 妻 には 會はで 別れ、
恩ある 老母 は やまひ 篤し
營所 を のがれて 歸り來てし
心 は さすがに 優しけれご、
あはれ、御空 を 落ちし 鳥、
胸 に 傷持つ 苦しき よ。

露兵一

何をもがくのだ。

露兵二

そこ動くな。

(と、また左右より蹴る。)

脱營兵

やア、黙つて居れば兎や角と——目の黒い
間は、この身も日本帝國の軍人だぞ。

露兵一、二

何だ、この死にそこない奴が。

(また蹴る。)

脱營兵

ちよい。

(と、立ち行かんとすれば、身は後ろ手。どろく
にて、運命神、また現はれ、結べる印を解けば、露
兵消ゆ。これより段々、月光暗くなる。)

樂座(合唱)

本意なき 繩目に 引き繋がれて、
ひそかに ぬぐへる 涙の まなこ——

月 さへ曇りて 小暗き この場、
ためらふ 前には 老母の 御かほ。

運命神(獨唱)

劫風、毒龍、ラルロ。

(また印を結べば、どろくにて、老母の幻影、
現出。運命神、消ゆ。)

脱營兵(白)

おお、母上――

老母幻影(獨唱)

あけ暮れ 鎮守の 神に 詣で、
祈りし 願ひは いまし 故ぞ。
わが身は 年波 安く 越えて、
この世を 今こそ 渡り來ぬれ。
先祖の 家の名をば
かまへて 穢す勿れ。

脱營兵(白)

それでは、母上は、もう、あの世へ―― 申し、
申し、母上――

(どろくにて、運命神、また現はる。)

運命神(獨唱)

ラルロ。

樂座(合唱)

見る見る 變りて、妻のすがた。

(どろくにて、老母の幻影、妻の姿となる。運命神、消ゆ。)

脱營兵(獨唱)

おお、お民か
子等を如何に。

妻の幻影(獨唱)

朝ゆふ 食事の席に坐はり、

いのりし言葉は君が爲め。

二人の子等をば夜るの火かけ、

寂しき孤獨をまもりたり。

御國の爲めに盡し、

功蹟を示めし給へ。

脱營兵(獨唱)

さばれ、二人の子等は如何に。

樂座(合唱)

ああ、わが妻よと近づけば、
また現はれし運命神。

(どろくにて、運命神、現出。妻の幻影、あとす
さりして、消ゆ。)

運命神(獨唱)

天綱のがれ難し、
運命、なれをのろふ。

(神、また杖をまわせば、脱營兵、くるくまわ
る。月光、明るなる。)

脱營兵(獨唱)

あはれ、老いたる母に別れ、
なほも妻にはあざけらるゝ。
今朝のたよりを受けずあらば、
もとの心は續くべきを――
敵は満洲にあらず、
妻子ぞほだし。――
あはれ、如何なる天魔入りて、
斯くやわが身を迷はしむる。

運命神(獨唱)

そこに 無言の教へあり、
そこに 無形のつるぎあり。
切れや、こゝろを繋ぐ綱を。
解けや、その胸を照らす文字を。

脱營兵(獨唱)

われは 營所をのがれ來たり、
ああ、神にも、佛にも、
この胸、この身は、見捨てられしか。

樂座(合唱)

解けや、その胸を照らす文字を。
切れや、心を繋ぐ綱を。

脱營兵(獨唱)

この胸——この綱——この身——この手。

(怪物すべて出て來たり、脱營兵の上のうち
群がり、運命神の杖につれて、大くまわる。大
どろくにて、舞臺を眞暗にし、更らに營所
の門前を現はす。)

番兵(獨白)

今のは夢であつたか。

樂座(合唱)

身みををもて國くにをを護まもる、
死しすともおそるべしや。

(夜中行軍の一隊、號令に従つて歸り來たる。
番兵、直立、之を迎ふ。喇叭の音にて、暮。)

悲戀悲歌 終

明治三十八年六月七日印刷
明治三十八年六月十日發行

複製
不許

著
作
者

岩野美衛
東京市芝區西久保八幡町九番地

發
行
者

日高藤兵衛
東京市本鄉區元富士町二番地

印
刷
者

山本邦彦
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印
刷
所

日本印刷株式會社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發
行
所

東京市本鄉區
元富士町二番地

日
高
有
隣
堂

悲戀悲歌奧附

定價金參拾五錢

郵稅金四錢

大 賣 捌

- | | | | |
|------------|-----------|---------------|-------|
| 東京市京橋區尾張町 | 警 醒 社 | 鹿兒島市松山通り仲町 | 久永新藏 |
| 東京神田區表神保町 | 東 京 堂 | 筑後久留米市 | 菊竹書店 |
| 東京神田區裏神保町 | 上 田 屋 | 靜岡市 | 吉見書店 |
| 東京日本橋區箱屋町 | 前 川 | 橫濱市 | 弘 集 堂 |
| 東京京橋區南傳馬町 | 目 黒 書 店 | 同 | 勉 強 堂 |
| 東京神田區表神保町 | 修 學 堂 | 前橋市曲輪町 | 煥乎堂書店 |
| 大阪心齋橋南久太郎町 | 福 音 社 | 越後國水原 | 西村六平 |
| 大阪南本町座敷ノ前 | 杉 本 書 店 | 新潟古町 | 西村支店 |
| 大阪備後町四丁目 | 吉 岡 平 助 | 越後長岡 | 覺張次平 |
| 京都三條寺町 | 聖 書 房 | 金澤市片町 | 宇都宮書店 |
| 京都二條寺町 | 若 林 書 店 | 高岡市守山町 | 學海堂書店 |
| 甲府市柳町壹丁目 | 大塚柳正堂 | 福井市佐桂枝中町 | 品川書店 |
| 甲府常盤町 | 阪本温故堂 | 信州長野市大門町 | 西澤喜太郎 |
| 水戸泉町 | 川 又 銀 藏 | 信州松本本町 | 松 榮 堂 |
| 野州足利町一丁目 | 青 木 書 店 | 信州諏訪町 | 日 進 堂 |
| 廣島市 | 積 善 館 | 仙臺市新傳馬町 | 紀 港 堂 |
| 岡山市岡山町 | 奧田金昌堂 | 仙臺市大町五丁目 | 藤崎書店 |
| 周防國岩國町 | 白 金 日 新 堂 | 陸中一ノ關町 | 佐藤喜年 |
| 山口大市町 | 同 支 店 | 陸奥弘前市土手町 | 今泉道太郎 |
| 高知市種崎町 | 澤 本 書 店 | 青森市米町 | 同 支 店 |
| 熊本市新町二丁目 | 長 崎 次 郎 | 秋田市茶町 | 成見清兵衛 |
| | | 北海道札幌區南一條西二丁目 | 富 貴 堂 |

明治三十八年六月一日印刷
 新刊發行之都度增補訂正す

有隣堂出版書目

東京市本郷區元富士町二番地

日 高 有 隣 堂

主意書

理想と光明とを緯となし、趣味と利用とを經となし、宗教、哲學、倫理に、史傳に、戯曲に、小説に又緊急問題に就きての際物に、苟しくも文明の増進と風教の醇化に大なる功益あるものは其の大家名流たると壯快なる新進文士たるとを問はず、其の玉稿を請ふて出版せんとす是れ本堂の主義也。此の故に本堂は全國各位の愛顧を蒙り御信用を得んが爲めに本堂出版の新刊書籍に對する新聞雜誌の精評を掲げ御觀覽に供し來たり候も漸次増加し其數多くして載せ盡す事不能不得止出版書目而已を掲げ御觀覽に供し御注文を仰ぐことゝしたり。請ふ其の意を諒せられんことを。

網島梁川著

新刊 梁川文集

定價金 貳圓
郵税金 拾五錢

上製總クロース頁數八百余頁頗ル美本

著者十年病褥に在つて、而も靈筆を絶たず、その文、世既に定評あり、その外形の整然として順序ある、その内容の深遠にして趣味多き、之を讀むなを決して否定せざる所、本集凡べて七拾餘篇、文藝、美術、宗教、倫理、教育、等に關する長短文並に美文雜筆を集む、蓋し散文界の鹽なり、泉なり、光明なり、必ず一部當代の渴を癒すに足らん願くば一本を購つて、座右の友とせられんことを。

文學士大町桂月著

新刊 家庭と學生

定價金 參拾八錢
郵税金 六錢

著者申す、我れに三男一女あり其れを斯くは、しつけむ、我れも斯くは覺悟せむと心に期するのみにて能く實行せむと斷言し得べき身の上ならねど家庭教育の大切なることを今更のやうに感じて愚者の一得もやとて世の青年の男女の前に呈し合して世の父兄の前にも呈する者也

依仁親王殿下待講
早苗田大學教授

杉山令吉先生書簡
黑澤辰三郎編

新刊 日本名家手簡

定價金 參拾錢
郵税金 六錢

世に立つて事をなさんとするもの先づ書簡文に熟達せざるへからず、書翰文に熟達せんと欲するもの先づ先輩の往復文を研めざるへからず、是れ本書の出る所以なり、本書怪むる所我國大家の模範文に附するに各其小傳を以てし並に書簡の變遷を明にす、苟くも當世活舞台に雄飛せんとするものは、男女を欲せず一讀せざるべからず

岩野泡鳴著

新刊 詩集 悲戀悲歌

定價 參拾五錢
郵税金 四錢

著者の詩、既に世に定評あり、その久遠無窮の悲觀、常に高遠幽邃なる冥想を経て、廣く人間界の煩悶を靈化す、蓋しこれ現代の詩界に獨得の地歩を占むるもの而して「想の詩人」「海の詩人」今やまた「人間界の詩人」と呼ばれんとす、向上か墮落か、乞ふ、この「悲戀悲歌」を見て、之を判じ給まへ

大町桂月先生序

角金潮聲著

新刊 宇宙と人生

定價 貳拾五錢
郵税金 四錢

宇宙人生の問題豈常人の言ひ易き所ならんや茲に哲學者あり宇宙の幽を闡き之を究め森羅萬象の生滅變化の本源に遡りて人生の眞諦を内觀直視せんとす茲に詩人あり天地の美に動き眞に肉薄して以て人生の本義を直觀捕捉せんとす本書は哲學者の想と詩人の情を文に綴りしもの古高の韻、艷麗の致、讀者をして三嘆せしむ宇宙と人生とを謳はんとする者は來りて本書を繕け

文學士 大町桂月先生著

五版 わが筆

定價四拾五錢 郵稅六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり霸氣あり或は洒脱に或は沈痛に或は眞面目に或は談諧に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆を以てす家庭學校社會及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の快文字也

茅原華山先生編纂

新刊 青年と詩吟 定價 廿五錢

人生豈詩思詩情なかるべけんや『青年と詩吟』を茅原華山先生が岩溪裳川、森槐南、佐々木信綱、平木白星、佐藤紅綠、山縣五十雄、野口米、の諸先生に囑して各其愛誦する漢詩、和歌、新体詩、俳句を撰び之を『向上の一路』に載せたるものなり今や新に竹越三又、志賀矧川、伊藤銀月等諸家の愛誦詩歌を添へ別冊として發行す日夕此卷を把りて諷誦せば其品性を修養し其志氣を砥礪するの功蓋し計るべからざるものなり

* * * * *

文學博士 姉崎先生序
萬朝報記者 茅原華山著

增補版 第四版 改訂 第一新



○定價十六錢郵稅十錢

安部磯雄氏の駁論 附録とす
及著者の駁々論を

▲向上の一路に就かんと欲する者は此書を讀め▲此書は個体責任、社會意識、生命一体の三大觀上に社會向上主義を論明したる者なり、▲我國に於て哲學的に社會主義を建設したるは▲安部氏の駁論及著者の駁々論は益々新社會主義の本領を發揮せり▲第一、▲近時の一大著述にして情理該れ臻る者は此書なり敢て江湖の讀書子に勸む

文學士 大町桂月先生 合著
文學士 中内蝶二先生

五版 少女と山水

定價三十五錢 郵稅四錢

人生の美凝つて少女に在り自然の美凝つて山水に在り山水の美や豪宕にして瀟洒少女の美の優婉にして可憐蝶二君の艶麗の文少女の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月君の洒脱の文山水の幽趣を寫して雲烟紙表に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を縦にし高尚優雅家庭の讀物ともすべく文章の手本ともすべし腥風血雨に惱める軍國の讀者諸賢幸に這般清麗の文字に接して宇宙の美を味ひ給ふべき也

文科—文學士夏目金之助先生校閱
大學—文學士上田敏先生序文
講師—アーサー、ロイド先生
チャールズ、ラム著 文學士小松武治譯

訂正 標 沙翁物語集 定價 七十錢
五版 註 郵稅 十錢

●上製クロース四百數十頁頗る美本
古英雄亞歷山陣中に在りて常にホーマーを
誦し那破倫大帝兵馬の間、手、ゲーテを繙か
ざることもかりしと聞く戰勝國民豈に文界
の巨壁シエイクスピアを讀むの餘裕なく
して可ならんや本書は沙翁戯曲中最も有名
なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、
ジュリエット及冬物語等通じて十編の物語
を抜萃し精緻なる翻譯を誠み懇到なる註解
を施し加ふるに數種の附録を以てす。特に
文科大學講師先生の校閱を仰ぎたる者にし
て苟も沙翁戯曲の何たるやを窺はんと欲す
るの士は須らく一本を購ふて座右に備ふべ
きの書也

東京外國語山口小太郎先生題詩
學校教授 蘆風秋元喜久雄譯

訂正 獨逸 紛紅集 定價卅五錢
三版 詩粹 郵稅四錢

美術的製本

ゲーテ、シルレル、ケルテル等獨逸の七大神
人が金玉の佳什を選び、之を流麗精真なる
筆を以て、翻譯したるもの、一句一字の細
と雖ども、悉く原詩の美を顯はしく遺さず。
收むる所、清美なるあり、優婉なるあり、
風雅なるあり、艶麗なるあり、例へば飛紅
紛々として、蒼勃たる香氣、人をして酔は
しむるが如きもの集まつて皆此中に在り、
別に原詩を添へ對照に便す。



海老名彈正先生著

再 版 基督教本義

○上製 六十五錢
○並製 郵稅十錢
五十五錢
郵稅八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解
答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放て
る豫言者師教祖の抱懐せる思想經驗に依ら
ざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈
正先生卓抜の識勇健の筆を以て上はモーゼ
より下ルーテル、ニュライエルマツヘルに
到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教の
本義を説明せられたるもの也幸に愛讀の榮
を賜へ



海老名彈正先生著

再 版 宗教々育觀

定價五十五錢
郵稅 八錢

宗教界の明星として名聲天下に轟ける海老
名先生は本書に於て教育問題に關する所信
を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動す
るに足るものあるや必せり見よ先生が該博
の識公明の論一讀人をして快刀思想界の亂
麻を截つの感あらしむ而かも本書の内容は
單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に
對する先生最近の思想を發表せられたるも
の實に濼々たる我邦思想界に於ける一大探
海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目
して本書の光焰に接せよ

* * * * *

苦學社社輯

苦學の伴侶

定價三十錢
郵税四錢

生活の道に往き艱める苦學生は此の書を讀め此の中に安慰と光明とを得ん堂々たる我國現時の諸大家の成効の秘訣を知らんと欲する者は此の書を讀め此の中に諒々たる師父の聲咳に接することを得ん嗚呼苦學嗚呼苦學古今誰か苦學せずして成効したる者やある苟も學生にして苦學の心得なき者は忠實なる學生と謂ふこと能はず然れば此の書は學事に志せる總ての青年男女の好伴侶なりと謂ふべし請ふ諸君一本を座右に供せられんことを



海老名彈正先生著

人道

定價十錢
郵税二錢

先生時局に關し大に感慨するところあり其の豫言者の熱誠を傾盡して雄渾壯大萬丈の光焰を吐き以て日露戰爭の意義を高め國民の元氣を鼓舞作振せんと欲す營に軍國々民の必讀書たるのみならず軍隊慰問用の好冊子なり幸に陸續注文を賜へ

匿名隱士著

破天人論

定價參拾錢
郵税四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる壯快の書也本書の出づるや全國各新聞紙雜誌の大好評を博せり出版日尙淺きに不拘既に六版を印刷せり以て本書が如何に愛讀せらるゝやを知るべし



齋木仙醉先生譯

トルストイ教訓小説集

定價金參拾錢 ● 郵税金四錢

トルストイの宗教論や、大作小説や、洵に是れ雄渾なる革命の聲也、凄壯なる大煩悶の聲也、思ふに渠が現世界の最大文豪たる所以蓋し茲にあらん。然れども人は狂瀾怒濤を壯とすると共に、湛然一碧の湖水を樂しまざるべからず。深林巨巖を賞すると共に、鳴禽野花を愛せざるべからず。本書は即ち後種の渴望を充たす處の光明の書也。讀者若し之を繙かば、鬢髮雪の如き老文豪が、如何に諄々として、天使の如き聲を以て、博愛、自然、自由、勞働の大々的福音を鼓吹するかを視ん。

加藤直士先生譯

トルストイの 日露戦争観

●定價金三十錢●郵税金四錢

露國巨人トルストイ伯が今回の日露戦争に關して如何なる意見を抱きつゝあるかは何人も知らんと欲する所なり然るに伯は倫敦タイムズに於て「日露戦争観」と題する一大論文を掲げて最も雄渾痛切に其詳細なる意見を發表したり今や邦人鶴首して其内容の全斑を知らんと欲する時に際して翁紹介者を以て有名なる加藤先生に請ふて其全篇を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さんと欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

横山筆助著

再版 成功したる 催眠暗示術 應用自在

●定價三十錢●郵税金四錢

近時催眠術の書物多々出版せらるゝと雖、大抵不充充分なる譯書、實際に益なき空論的なもののみ多し、之に反して本書は經驗に經驗を積みたる斯學の老練家が、最新の學理と諸種の方法とを參考して何人にも理解し得るよう又極めて懇切に述べられたるものなり、且つ加ふるに興味ある實驗畫を以てす、本書出でて、我が催眠術界の知識すること必ず大ならん、好學の諸君御愛讀あらんことを。

高橋五郎著

杜伯品藻

定價卅五錢

郵税六錢

トルストイ伯の人物主義を評す
一言一行一動一靜天下の毀譽賛斥を招致すトルストイ伯も亦豪傑なる哉之を見ること或者は神の如く或者は鬼の如くす著者此世界主義的博愛的絶對愛他的極端非戰的偉人物を四方八面より縦横論評し玲瓏玻璃屋に住する如し其媼妍得失一目瞭然真理の爲に之を論ず豈唯敵國の偉人として之を評隲する而已ならんや◎讀書子愛讀の榮を賜へ



文學士 大河桂月先生書翰 木村麗太郎先生書翰
文學士 上田敏先生書翰 前田林外先生書翰
岩野 泡鳴著 青木 繁先生畫

新集体 夕潮

定價三十五錢

郵税六錢

著者の詩冥遠幽邃、深く多大の情熱を藏して、うちに無窮の悲觀を備ふる而してその行文自在の調、激して豪健奇抜の想を構へ、沈んでまた可憐の情を寄す、海に向つて、苟も久遠の感慨あるものは來つて、この冥想的詩人の「ゆふ潮」を一讀せられよ、



茅原華山編纂

白田亞浪、平野劍客、菊島濤陰、野田花子、田路てる子筆録

我 と 人

定價貳拾錢
郵稅六錢

本書は世間の好評を博したる『向上の一路』生命一昧篇を別冊と爲したるものにして萬朝報の黒岩先生を始め天龍、天山、柏軒、白蛇、松葉、掬汀、銀月諸氏より森槐南、姉崎嘲風、成瀬仁藏、菊池群藏、内藤鳴雪、佐々木信綱、湯本武比古、三宅克己、徳永柳洲、齋藤松洲、井口あぐり諸家の談論文章を筆録したるものなり、柳は緑、花は紅、是書を読めば諸名家と共に一堂春風の中に座するの感あるべし

* * * * *

月刊雜誌 (毎月十五日發行)

基督教講壇

定價一部
金拾錢
郵稅一部
金五厘

●半年分金五十八錢一ヶ年分金壹圓〇六錢
●切手代用一割増一切前金の事
本誌は東京にある各學生及市青年會聯合の編輯にかゝるものにして教派の異同學説の相違に關せず都下と地方とを問はず現代基督教界に立つて福音宣傳の任に當れるあらゆる大家の説教を網羅し眞に能く生命の麴麵となり靈活の根源たらんことを期するもの也



